月夜のでんしんばしら

宮沢賢治

ある晩、恭一はぞうりをはいて、すたすた鉄道線路の横の平らなところをあるいて居(お)りました。たしかにこれは罰金(ばっきん)です。おまけにもし汽車がきて、窓から長い棒などが出ていたら、一ぺんになぐり殺されてしまったでしょう。

ところがその晩は、線路見まわりの工夫もこず、窓から棒の出た汽車にもあいませんでした。そのかわり、どうもじつに変てこなものを見たのです。

九日の月がそらにかかっていました。そしてうろこ雲が空いっぱいでした。うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの底までもしみとおってよろよろ

するというふうでした。その雲のすきまからときどき冷たい星がぴっかりぴっかり顔をだしました。

恭一はすたすたあるいて、もう向うに停車場(ていしゃば)のあかりがきれいに見えるところまできました。ぽつんとしたまっ赤なあかりや、硫黄(いおう)のほのおのようにぼうとした紫(むらさき)いろのあかりやらで、眼(め)をほそくしてみると、まるで大きなお城があるようにおもわれるのでした。

とつぜん、右手のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶって、上の白い横木を斜(なな)めに下の方へぶらさげました。これはべつだん不思議でもなんでもありません。

つまりシグナルがさがったというだけのことです。一晩に十四（じゅうし）回もあることなのです。

ところがそのつぎが大へんです。

さっきから線路の左がわで、ぐゎあん、ぐゎあんとうなっていたでんしんばしらの列が大威張（おおいば）りで一ぺんに北のほうへ歩きだしました。みんな六（む）つの瀬戸（せと）もののエボレットを飾（かざ）り、てっぺんにはりがねの槍（やり）をつけた亜鉛（とたん）のしゃっぽをかぶって、片脚（かたあし）でひょいひょいやって行くのです。そしていかにも恭一をばかにしたように、じろじろ横めでみて通りすぎます。

うなりもだんだん高くなって、いまはいかにも昔（むかし）

ふうの立派な軍歌に変ってしまいました。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
　でんしんばしらのぐんたいは
　はやさせかいにたぐいなし
　ドッテテドッテテ、ドッテテド
　でんしんばしらのぐんたいは
　きりつせかいにならびなし。」

一本のでんしんばしらが、ことに肩（かた）をそびやかして、まるでうで木もがりがり鳴るくらいにして通りました。

みると向うの方を、六本うで木の二十二の瀬戸もののエボレットをつけたでんしんばしらの列が、やはり

いっしょに軍歌をうたって進んで行きます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド
二本うで木の工兵隊
六本うで木の竜騎兵（りゅうきへい）
ドッテテドッテテ、ドッテテド
いちれつ一万五千人
はりがねかたくむすびたり」

どういうわけか、二本のはしらがうで木を組んで、びっこを引いていっしょにやってきました。そしていかにもつかれたようにふらふら頭をふって、それから口をまげてふうと息を吐（つ）き、よろよろ倒（たお）れそうになり

ました。

するとすぐうしろから来た元気のいいはしらがどなりました。

「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむじゃないか。」

ふたりはいかにも辛そうに、いっしょにこたえました。

「もうつかれてあるけない。あしさきが腐り出したんだ。長靴のタールもなにもめちゃくちゃになってるんだ。」

うしろのはしらはもどかしそうに叫びました。

「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どっちかが参っても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけったら。」

二人はしかたなくよろよろあるきだし、つぎからつぎとはしらがどんどんやって来ます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド
やりをかざれるとたん帽(ぼう)
すねははしらのごとくなり。
ドッテテドッテテ、ドッテテド
肩にかけたるエボレット
重きつとめをしめすなり。」

二人の影（かげ）ももうずうっと遠くの緑青（ろくしょう）いろの林の方へ行ってしまい、月がうろこ雲からぱっと出て、あたりはにわかに明るくなりました。

でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌（きげん）です。恭一の前に来ると、わざと肩をそびやかしたり、横めでわらったりして過ぎるのでした。

ところが愕（おど）ろいたことは、六本うで木のまた向うに、三本うで木のまっ赤なエボレットをつけた兵隊があるいていることです。その軍歌はどうも、ふしも歌もこっちの方とちがうようでしたが、こっちの声があまり高いために、何をうたっているのか聞きとることが

できませんでした。こっちはあいかわらずどんどんやって行きます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
寒さはだえをつんざくも
などて腕木(うでぎ)をおろすべき
ドッテテドッテテ、ドッテテド
暑さ硫黄をとかすとも
いかでおとさんエボレット。」

どんどんどんどんやって行き、恭一は見ているのさえ少しつかれてぼんやりなりました。

でんしんばしらは、まるで川の水のように、次から

次とやって来ます。みんな恭一のことを見て行くのですけれども、恭一はもう頭が痛くなってだまって下を見ていました。

俄(にわ)かに遠くから軍歌の声にまじって、

「お一二、お一二、」というしわがれた声がきこえてきました。恭一はびっくりしてまた顔をあげてみますと、列のよこをせいの低い顔の黄いろなじいさんがまるでぼろぼろの鼠(ねずみ)いろの外套(がいとう)を着て、でんしんばしらの列を見まわしながら

「お一二、お一二、」と号令をかけてやってくるのでした。

じいさんに見られた柱は、まるで木のように堅（かた）くなって、足をしゃちほこばらせて、わきめもふらず進んで行き、その変なじいさんは、もう恭一のすぐ前までやってきました。そしてよこめでしばらく恭一を見てから、でんしんばしらの方へ向いて、

「なみ足い。おいっ。」と号令をかけました。

そこででんしんばしらは少し歩調を崩（くず）して、やっぱり軍歌を歌って行きました。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
右とひだりのサアベルは
たぐいもあらぬ細身なり。」

じいさんは恭一の前にとまって、からだをすこしかがめました。

「今晩は、おまえはさっきから行軍を見ていたのかい。」

「ええ、見てました。」

「そうか、じゃ仕方ない。ともだちになろう、さあ、握手（あくしゅ）しよう。」

じいさんはぼろぼろの外套の袖（そで）をはらって、大きな黄いろな手をだしました。恭一もしかたなく手を出しました。じいさんが「やっ、」と云（い）ってその手をつかみました。

するとじいさんの眼だまから、虎（とら）のように青い火花がぱちぱちっとでたとおもうと、恭一はからだがびりりっとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。

「ははあ、だいぶひびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしとも少し強く握手すればまあ黒焦（くろこ）げだね。」

兵隊はやはりずんずん歩いて行きます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
タールを塗（ぬ）れるなが靴の
歩はばは三百六十尺。」

恭一はすっかりこわくなって、歯ががちがち鳴りました。じいさんはしばらく月や雲の工合（ぐあい）をながめてい

ましたが、あまり恭一が青くなってがたがたふるえているのを見て、気の毒になったらしく、少ししずかに斯（こ）う云いました。

「おれは電気総長だよ。」

恭一も少し安心して

「電気総長というのは、やはり電気の一種ですか。」とききました。するとじいさんはまたむっとしてしまいました。

「わからん子供だな。ただの電気ではないさ。つまり、電気のすべての長、長というのはかしらとよむ。とりもなおさず電気の大将ということだ。」

「大将ならずいぶんおもしろいでしょう。」恭一がぼんやりたずねますと、じいさんは顔をまるでめちゃくちゃにしてよろこびました。

「はっはっは、面白(おもしろ)いさ。それ、その工兵も、その竜騎兵も、向うのてき弾兵(だんへい)も、みんなおれの兵隊だからな。」

じいさんはぷっとすまして、片っ方の頬(ほお)をふくらせてそらを仰(あお)ぎました。それからちょうど前を通って行く一本のでんしんばしらに、

「こらこら、なぜわき見をするか。」とどなりました。

するとそのはしらはまるで飛びあがるぐらいびっくり

して、足がぐにゃんとまがりあわててまっすぐを向いてあるいて行きました。次から次とどしどしはしらはやって来ます。

「有名なはなしをおまえは知ってるだろう。そら、むすこが、エングランド、ロンドンにいて、おやじがスコットランド、カルクシャイヤにいた。むすこがおやじに電報をかけた、おれはちゃんと手帳へ書いておいたがね、」

じいさんは手帳を出して、それから大きなめがねを出してもっともらしく掛（か）けてから、また云いました。

「おまえは英語はわかるかい、ね、センド、マイブー

ツ、インスタンテウリイすぐ長靴送れとこうだろう、するとカルクシャイヤのおやじめ、あわてくさっておれのでんしんのはりがねに長靴をぶらさげたよ。はっはっは、いや迷惑(めいわく)したよ。それから英国ばかりじゃない、十二月ころ兵営へ行ってみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵殿(どの)に云われて新兵が電燈をふっふっと吹(ふ)いて消そうとしているのが毎年五人や六人はある。おれの兵隊にはそんなものは一人もないからな。おまえの町だってそうだ、はじめて電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百石(こく)ぐらい油をつかうだろうかなんて云ったもんだ。はっはっは、どう

だ、もっともそれはおれのように勢力不滅の法則や熱力学第二則がわかるとあんまりおかしくもないがね、どうだ、ぼくの軍隊は規律がいいだろう。軍歌にもちゃんとそう云ってあるんだ。」

でんしんばしらは、みんなまっすぐを向いて、すまし込んで通り過ぎながら一きわ声をはりあげて、

「ドッテテドッテテ、ドッテテド
でんしんばしらのぐんたいの
その名せかいにとどろけり。」

と叫びました。

そのとき、線路の遠くに、小さな赤い二つの火が見

えました。するとじいさんはまるであわててしまいました。

「あ、いかん、汽車がきた。誰(たれ)かに見附(みつ)かったら大へんだ。もう進軍をやめなくちゃいかん。」

じいさんは片手を高くあげて、でんしんばしらの列の方を向いて叫びました。

「全軍、かたまれい、おいっ。」

でんしんばしらはみんな、ぴったりとまって、すっかりふだんのとおりになりました。軍歌はただのぐゎあんぐゎあんといううなりに変ってしまいました。

汽車がごうとやってきました。汽缶車(きかんしゃ)の石炭はまっ

赤に燃えて、そのまえで火夫は足をふんばって、まっ黒に立っていました。

ところが客車の窓がみんなまっくらでした。するとじいさんがいきなり、

「おや、電燈が消えてるな。こいつはしまった。けしからん。」と云いながらまるで兎（うさぎ）のようにせ中をまんまるにして走っている列車の下へもぐり込みました。

「あぶない。」と恭一がとめようとしたとき、客車の窓がぱっと明るくなって、一人の小さな子が手をあげて

「あかるくなった、わあい。」と叫んで行きました。

でんしんばしらはしずかにうなり、シグナルはがた

りとあがって、月はまたうろこ雲のなかにはいりました。

そして汽車は、もう停車場（ていしゃば）へ着いたようでした。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
１９９０（平成２）年５月25日発行
１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」盛岡市杜
陵出版部・東京光原社
１９２４（大正13）年12月１日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年１月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。